

授業開きの構造

授業開きという場

『授業開きの構造』という書籍があります。そこには、次の一節があります。授業開きへの問題提起ともいうべきものです。

「授業開き」は、学習者の「自分は、この一年、こんな目標で、こんなふうに学習し、これこれしかじかの力をつけたいと思っている」姿勢づくりの場に、指導者の「この一年、こんな心づもりで、こんな学習をし、こういう力をつけたいと思う」願いを重ねる、そうすると、新たな決意が両者に生じる、そういう節目をつける学習の場なのである。

ところが、その出会いが、指導者と学習者の緊張した場になっているか、あるいは、そういう緊張の場であることを意識しているかということになると、はなはだ疑わしい。

次の記述もあります。

四月は、出会いの季節である。学習者にとって、学校ではこの一年間、どの先生に指導してもらうかが一大関心事となる。この出会いは半ば運命的なものであって、学習者自身の選択は全く許されず、学校の決定に従わざるを得ないというのが現実である。それなのに、この出会いは学習者にとっては生涯の方向を決めてしまうほど大きな力をもっている。学習者にとって出会いは一大事なのである。

指導者は、このことをもっと心にとめなければいけないと思う。厳粛に受け止めなければならないと思う。かけがえのない子どもとこの一年間おつき合いをするというこの偶然と必然に、じっと身を寄せ、真剣になりたいと思う。それゆえに、この学習者との出会いをどのようにするか、どのような言葉を交わし、どのような触れ合いを通して、この子との関係をつくっていったらよいかということに、もっと心を砕きたいと思う。言葉を教える立場にある指導者が、どのような言葉で学習者にかかわっていったらよいのか、もっと深く考えなければならないと思う。

上記の書籍の中から、授業開きの意義を確かめます。

学習者一人ひとりを知り、学習者一人ひとりが学習に必要な最低の学力（基礎的・基本的ともいうべき力）をつける学習として、単元「授業開き」を設定するのである。別の言い方をすれば、診断的評価を行い、学習の訓練をし、単元学習者、自己学習者を育てる単元ということになる。そしてそれは、年度最初の単元であること、すなわち四月が、向こう一年間、人間関係をもち続けていく最初の出会であるということ、また一つ、大きな意味をもつのである。

次の記述もあります。

学習者にとっては、この一年、自分は、どういうことを、どのように、どういう目標をもって学習するのか（学習していけばよいのか）という、学習に取り組む姿勢づくりの時である。と同時に、指導者に対して、今年はどういう学習をするのだろうかという期待で臨む場でもある。

また、授業開きにおいて必要なことも入っています。

この一年、どんな心づもりで、どのような学習をさせ、どういう力をつけ、一年経過したら、こんな状態に子どもをもっていきたい、といったようなある種の決意をする時である。そして、決意や願いを学習者に伝えなければならない。

こんな記述もあります。

指導者の話は、内容的に質の高いことが要求される。学習者の耳目はかなりこえていて、相当の高さのものでなければ受け入れもしなければ感動もしない。特に最初の時間の話は、内容・構成・話しぶりにいたるまで、学習者の評価の対象（値踏み）であることを心すべきである。したがって、国語教師は、普段から話のタネをストックし、読書などによる情報のインプットに心がけ、話すわざにも磨きをかけることを怠ってはならない。